

タイムスリップ初瀬街道 東海道から参宮表街道へ

■東海道

古代の律令制で設けられた地域区分を五畿七道という。五畿は山城（京都府）、大和（奈良県）、摂津（大阪府、兵庫県）、河内（大阪府）、和泉（大阪府）の五か国。七道は、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道。東海道は初め伊賀、伊勢、志摩、三河、尾張、遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、上総、下総、常陸の十三か国、のち安房、武蔵を加えて十五か国となった。これらの諸国を結ぶ街道も東海道と呼ばれ、都が大和の国にあった時代には伊賀の国から伊勢、志摩を経て尾張、三河に達した。672年の壬申の乱で、大海人皇子は大和の吉野から伊賀の名張に入り伊勢へ抜けたが、このルートが当時の東海道であったとされる。都が山城の国に移ると、官道は近江から鈴鹿峠を越えて伊勢に入るようになったため、メインルートは名張を通過しなくなった。

■那婆理、名墾、隠、名張

- 古代 「伊賀の須知の稲置、那婆理の稲置、三野の稲置の祖」（古事記／安寧天皇の時代）
- 645／大化元年 大化の改新。翌年正月の詔で畿内の四至を定める。「凡そ畿内は、東は名墾の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす」（日本書紀／孝徳天皇の時代）
- 672／天武元年 壬申の乱。吉野を出た大海人皇子は「夜半に及びて隠郡に到りて、隠駅家を焚く」、そのあと横河の手前で占卜（日本書紀）。大海人は乱後に即位して天武天皇となる
- 686／朱鳥元年 「名張厨司に災けり」（日本書紀）
- 692／持統6年 当麻真人麿の妻の歌「わが背子は何処行くらむ奥つもの隠の山を今日か越ゆるむ」（万葉集）
- 694／持統8年 飛鳥浄御原宮（奈良県明日香村）から藤原京（奈良県橿原市）に遷都
- 710／和銅3年 藤原京から平城京（奈良県奈良市）に遷都
- 711／和銅4年 初めて都亭の駅を設け、伊賀の国に新家の駅を置く（続日本紀／元明天皇の時代）
- 713／和銅6年 郡と郷の名称に好字を用いさせ、諸国に風土記の編纂を命じる（続日本紀）
- 755／天平勝宝7年 孝謙天皇が東大寺に板蠟柚を勅施入したという
- 784／延暦3年 平城京から長岡京（京都府長岡京市）に遷都
- 794／延暦13年 長岡京から平安京（京都府京都市）に遷都
- 1043／長久4年 東大寺の荘園、黒田荘が文献に初めて登場する
- 1581／天正9年 織田信長が伊賀を攻め、伊賀一国を統一する
- 1608／慶長13年 藤堂高虎が伊勢、伊賀両国に入部、伊賀の商売を上野、名張、阿保の三町に制限
- 1636／寛永13年 高虎の養子高吉が伊予の国から名張に来住、名張藤堂家の始祖となる

■参宮表街道

古代の伊勢神宮は皇室の祖先神であるため一般的な参拝は認められなかったが、律令制が衰退すると庶民の信仰対象となり、神宮側も御師と呼ばれる神職の集団を組織して信仰の拡大に努めた。中世末から伊勢参宮が盛んになり、とくに江戸中期から明治中期にかけて隆盛を極めた。各地から伊勢神宮に至る主要な街道が参宮街道または伊勢街道と呼ばれたが、江戸時代の東海道からは日永追分（四日市市）で参宮街道が分岐し、六軒（津市、旧三雲町）を経て山田（伊勢市）に入った。大和方面からは初瀬（奈良県桜井市）、名張を経由し、青山峠を越えて六軒に至る参宮表街道と、榛原（奈良県宇陀市）から奥宇陀の山間を通過して山田に出る伊勢本街道とがあったが、山越えの多い本街道よりも平坦な表街道のほうがよく利用された。表街道は初瀬街道とも呼ばれ、明治時代に入って初瀬街道が公称となった。